

会員ニュース

柏原正樹さんの京都賞受賞をお祝いして

京都大学国際高等教育院 副教育院長／特定教授
三輪 哲二

ひとこと述べる機会をいただきましたので、いくつか思い出を書かせていただきます。実は、昨日受賞記念講演を準備されている柏原さんからメールと共に数枚の、というより 2×3 枚の写真が届いて「上段の 2 個と二段目右の写真は、どの機会にとったかわかりますか？」と尋ねられました。その中の一枚は数理研の 420 で、佐藤先生が司会者としてそばに立っておられる写真で、かくだいかくだい、して見ると「ソリトン」の文字がめくり（とは言わないですが）にありました。ああやはりと思いながら年代を調べようと、ネットを開けて、いきなり藤原賞受賞の時の数学通信に書かせていただいた記事が出てきたのです。なんと、そこにはこれから書こうと眠りながら頭の中で泳がせていた事柄がほとんど書かれているではありませんか。一瞬、誰も気がつかないだろうからこれを書き写してしまえ、というアイデアが浮かんだのですが、もういちど頭の中を調べてみると「続柏原さん入門」を書くぐらいの材料が残っていることがわかって、藤原賞は枕に使わせてもらうだけにしました。

編集部からの依頼状には業績やエピソードなどを、とありましたが業績についてはご本人の受賞記念講演を見ていただくことにして、柏原さんとの「とき&とち」を書かせていただきます。下記も一緒にご覧ください。

mathsoc.jp/publication/tushin/1303/kashiwara-miwa.pdf

Paris に着くと真っ先に行く中華料理のお店がありました。お店はいまでもありますが、ミラマとって、私と神保さんの定宿だった Hotel du Brésil からスフロを横切ってソルボンヌの前をセーヌの方に下りていくと、ポール・パルヴェ広場があって、さらにサンジェルマンを渡って道の反対側にある高級「牡蠣」料理をとりすぎたところです。ここで、Soupe de canard laqué を注文するのが私のパリでの決まりごとで、このお店にはじめて連れて行ってくれたのが柏原さんでした。いまでもギャルソン等の顔が浮かんできます。その中には妻のお気に入りとなった顔もありました。

柏原さんとのパリの思い出としては **Opéra Bastille** で **Porgy and Bess** をふたりで聴いたことがあります。妻が急に帰国したため柏原さんを誘いました。専門が同じというわけではなかったのですが世界のあちこちで一緒になるということはありませんでしたが、柏原さんにとってのパリは特別で、そのときもパリ滞在中でした。ヨーロッパではパリ以外の都市でいっしょになった覚えはありません。アメリカでは、ソリトンの仕事をした直後に **Stony Brook** を訪ねていて、そのときに **McCoy** さんに頼んで柏原さんに来てもらったことがあります。講演を頼んだわけではなく、私が **Yang** さんを前にソリトンの話をしたのを聞いていた柏原さんに「上手になったね」と言われたことを覚えています。ところがその翌日柏原さんが帰ってしまった後で **McCoy** さんがやってきて「サインをしないで帰ってしまった」というのです。結局、生涯に一度の代筆をする羽目になりました。私の中では、会議における佐藤先生と柏原さんの違いという命題があって「片方は知っていて来ない、もうひとは完全に忘れる」というのですが「どちらも普通のレベルではない」という注がついています。

私自身は逃げることになりましたが、佐藤先生も柏原さんも見事に数理解析研究所の所長職をこなされました。柏原さんの所長時代はまさに普通ではありませんでした。今出川通りを越えるときのために部屋のロッカーにスーツ一式と靴下・靴が置いてあって、いざ出陣の時は **T** シャツ短パンから着替えるのです。出かけた先の会議での様子については想像したことはありませんが、居眠りせずに座っておられた点についてはなぜか確信があります。任期が終わると見事にもとの **T** シャツ短パン **ONLY** に戻られたのは印象的でした。佐藤先生と柏原さんの数学について感謝することは限りなくありますが、数理解研に所属したすべての人々にとって、おふたりの所長としての貢献も忘れてはならないと思います。

私は第二外国語がロシア語でロシアについては何時間でも話し続けられますが世界の数学の七不思議のひとつは柏原さんがロシアに行ったことがない、というのがあります。それはともかく、インドについては私も柏原さんも一時はまっていました。ハイデラバードで **ICM** が開催された **2010** 年は直前のサテライトも含めて一緒に参加しました。木陰のテントの下での朝ごはんとか、ふたりでリクシャーに乗ってどこかへ行ったこととか、サテライトでの時間の流れは他のすべてのインドにおける時間とともに、今も私の中を流れています。

海外の話だけでなく京都の話もいくつか書くことにします。二年ほど前から私の職場の建物が変わって、柏原さんと昼ごはんのエリアが重なるようになりました。私が同僚の先生方と食べ終わってお店を出ると柏原さんが通る。あるいは東一条の

交差点を渡っていると向こうから柏原さんがやってくるという具合です。私が数理研にいた 1980 年代、昼を一緒のことが多くありました。今出川通りに出て左の方に少し行ったところの横丁の定食屋で、座ると出てくる定食を食べていた時代もあります。佐藤先生、河合さん、柏原さんの 3 人が每晚通った伝説の「銀仙」はだいぶ前になくなり、蕎麦屋の定番も「茂平」から「實徳」にかわるなど、大学近辺の変化は多くありますが、柏原さんの昼飯に関する興味と関心は少しも衰えていないようです。ちなみに生協で柏原さんと食事をした記憶は全くありません。

数理研の建物内部でのことも書きましょう。数理研は建物の新築拡張ということが叶わなかったため、いまでは今出川の南にいくつかの分室を持っていて、柏原さんもある時点からそちらに移っていますが、昔の数理研の教授室は数学教室のそれと同じぐらいの大きさでした。特に 3 階の佐藤先生の部屋には、その時代ごとに河合さんと柏原さんだったり、神保さんと私だったり毎日集まって議論をしていました。柏原さんが名古屋時代の海外出張から数理研の教授として戻られた頃はまだその広い教授室の時代でした。その時代に一時期、柏原さんの長期出張の間、4 階の教授室をひとりで使わせてもらったことがあります。いまから考えると不思議な時代でした。その後、私自身が教授になった時までにはすべての教授室は 2 分割されていて、新しい部屋に移るということはありませんでした。

最後に私がどのように調和振動子と \mathfrak{sl}_2 の有限次元表現論を学んだかという話をします。数理研で助教授になって大学院の選考面接に出るようになると、毎年荒木先生と柏原さんがそれぞれ同じ質問を口頭試問でされるということに気づきました。荒木先生は調和振動子の生成消滅演算子による対角化の話、柏原さんは \mathfrak{sl}_2 の有限次元表現のことを聞かれ、おふたりとも学生をうまく誘導して正解にまで導くということをされていました。そのやりとりの中で私は学生時代の不勉強の穴埋めをさせてもらったというわけです。その後数学教室に移って、授業や大学院入試に関わるようになり、調和振動子は微積分の授業の中で何度か使わせていただきましたが、 \mathfrak{sl}_2 を大学院入試の面接で持ち出したのは大失敗に終わりました。

昔のことばかり書いてきましたが、柏原さん自身は今現在、数学だけの生活が続いています。すでに大学院生の指導ということはないと思いますが、多くの共同研究者との数学の研究生活はこれからも続くと思います。引き続き、ときどき昼飯を一緒にとというお願いをして、京都賞受賞のお祝いの一文とさせていただきます。